

## 飛雲の形の木製品発見

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



出土した雲形木製品

名神高速道路の南側、東は近鉄京都線、西は桂川に挟まれた地域は、鳥羽離宮の推定地にあたる。

時は、平安時代の終わり頃（12世紀頃）、天皇の位を退いた上皇が政治を執り行なう政治の仕組みがとられた。院政である。院政の頂点にたった白河法皇（出家した上皇）・鳥羽法皇・後白河法皇・後鳥羽法皇は、一方の権力者である藤原氏・平氏・源氏・北条氏とある時は協力し、ある時は対立しながら大きな権力をふるった。鳥羽離宮は、法皇たちがその権力を背景に広大な寝殿や荘厳な御堂を営ん

だ院政の舞台の一つなのである。鳥羽法皇の名も、この鳥羽の地をいとしんだことから贈られた名である。

鳥羽離宮跡の本格的な調査は、1958年の測量調査にはじまる。今では、発掘調査は100回を優に越え、昔日の威容が次第に明らかになってきている。

1989年春の鳥羽離宮東殿跡の調査では、汀にこぼし大の石を敷きつめた池の一部を見つけ出した。その池を埋めた土の中から、上に写真を掲げた雲の形をした木製品が2点出土したのである。残念な

ことに2点とも一部しか残っておらず、大きさは写真右のもので縦9.6cm・横13.1cm、左のもので縦6.9cm・横12.1cmになる。黒く見えるのは漆である。趣は異にするものの、どちらも立体的にたなびく雲を表現している。

さて、この雲形木製品、実は、雲中供養菩薩像という雲に乗った仏像を表現した彫刻の一部とみられる。現存する雲中供養菩薩像は宇治平等院鳳凰堂で見ることができ、そこでは本尊の阿弥陀如来を取り囲むまわりの壁に52体の菩薩像が掛けられ、極楽浄土の有様を



『雲中供養菩薩像南3号』 平等院蔵



平等院鳳凰堂



調査した池

表わしている。仏の姿や僧の姿、立ったり、座ったり、鉢かねを叩いたり、蓮華を捧げたり、その姿態は多種多様で、乗っている雲もまた様々である。

阿弥陀如来を信仰し、西方極楽浄土に成仏することを願う浄土信仰は、平安時代後期（11世紀頃）から急速に高まった。この教えは最初、現世では立身出世の望みを断たれた中・下流貴族に信仰され、やがて権力を握りながらも繰り返し起こる政変に失脚の不安に怯えていた上流貴族の心をもとらえた。彼らは、現世に極楽浄土を移すかのように巨大な堂塔伽藍を次々と

建立し、その功德によって極楽に成仏することを願ったのである。平等院鳳凰堂も関白藤原頼通が建立した建物の一つで、この建築と庭園は当時の最高のもので賞賛されている。

鳥羽離宮が営まれたのは、浄土信仰が最も盛んな時期であり、東殿の地には、寝殿とともに成菩提じょうぼだい院御堂・三体阿弥陀堂（安楽寿院）・九体阿弥陀堂（無量寿院）などの仏堂があったことが文献より知ることができる。これらの建物の位置は一応想定できる。池に面した西側やその周辺にこれらの建物が立ち並んでいたに違いない。今回

出土した雲形木製品も雲中供養菩薩像として、東殿の仏殿の内部を飾っていたのであろう。それが建物の修築もしくは廃絶により、池の中に捨てられてしまったのである。

鳥羽離宮跡からはこの他にも、仏殿と関係する瓦・建築部材・飾り金具、また、木製の五輪塔そとぼ・卒塔婆とぼ・呪符や法華経の一部をしたためた河原石などの祭祀遺物が出土している。私たちは、これらから、平安時代末期の建築様式とあわせて法皇を筆頭とする当時の権力者たちの信仰の一端をうかがい知ることができるのである。